

七福神詣

三遊亭円朝

青空文庫

「元ぐわんじつ日かみよや神代もりたけのことも思はるゝ」と守武ほつくの発句を見まして、
 演題えんだいを、七福神詣りふくじんまゐとつけましたので御座ござります。まづ一陽やう
 来復らいふくして、明治三十一年一月一日の事ごとで、下谷したやひろこうち広小路とほを通る
 人の装束なりは、フロツクコートに黒やまたかぼうしの山高帽子いただを戴ぎよくえき、玉柄まゐの
 ステツキたづさを携ふらんすせいへ、仏蘭西製くつの靴はを履はき、ギシリまゐくとやつて参まゐり
 ハタと朋友ほういうに行逢ゆきあひまして、甲め「イヨお芽出めたう、
 は何なにかと。乙ほく「やお芽出めたう存ぞんじます、相変あひかはらず、君きみは何所どこへ。
 甲ほく「僕は七福神詣ふくじんまゐりに行くゆんだ。乙ほく「旧きゆう弊へいな事を言いつてるね、
 七福神詣ふくじんまゐりといへば谷中やなかへ行くゆんだらうが霜しもどけで大変たいへんな路みちだ
 ぜ。乙ほく「なアに誰だれがあんな所ところへ行くゆもんか、まア君きみ一いっしょ緒しよに行ゆき

たま 給へ、何処ぞで昼飯を附合給へ。乙「そんなら此所から遠く
 もないから御成道の黒焼屋の横町さ。甲「解つた、松葉
 ばや屋のお稲の妹の金次が待合を出したと聞きました。乙「未だ
 ぼくは家見舞に行かず、年玉の義理をかけてさ。甲「好しく。
 と直に松葉屋へ這入ると、婢「入らつしやい、お芽出たうござい
 ます、相変らず御鼻肩を願ひます、モシ、ちよいと御家内さん、
 福富町の旦那が。家内「おや、旦那好くお出でなさいました
 ね、金吹町さんまア好く入らつしやいましたね、今年は元
 日じつから縁起えんぎが好い事ね。乙「時に昼飯ひるめしの支度したくをしてちよいと
 一杯ぱいおくれ。家内「松源まつげんか伊予紋いよもんへ申付まうしつけます、おや御兩人
 様さんからお年玉としだまを有難ありがたうございます、只今ただいま直すぐに、私わたしは元ぐわんじ

日ひからふくくです事ことよ。と下したへ降おりて行ゆく。乙「其そのの福ふく々
 で思おもひ出したが、七福廻ふまはりと云いふのは一たぎみ体み君きみは何どこ処こへ行ゆくんだ。甲
 「僕ぼくの七福廻ふくまはりといふのは豪がうしやうしんし商もと紳まは士しの許もとを廻まはるのさ。乙「へ、
 へ——何どこ処こへ。甲「第一だいい番ばんに大だい黒こく詣まゐりを先さきにするね、当たうじがうし時じ豪ごう
 商やうしんし紳しん士しで大だい黒こく様さまと云いふべきは、渋しぶ沢ざ栄えい一いち君くんだらう。乙
 「な——る程ほど、にこやかで頬ほの膨ふくれてゐる所ところなんぞは大だい黒こく天てんの相さう
 があります、それに深ふか川がはの福ふく住ず町みやうの本ほん宅たくは悉みな皆こめぐら米こめ倉ぐらで
 取とり囲まいてあり、米こめ俵だはらも積つみ揚あげて在あるからですか。甲「それば
 ツかりぢやアない、まア此この明めい治いち世せ界かいにとつては尊たふとい御お仁ひとさ、福ふ
 分ぶんもあり、運うんもあるから開かい運うん出しゅつ世せ大だい黒こく天てんさ。乙「成なる程ほど、
 子こ分ぶんの多た人にん数ずあ在あるのは子こ槌づちで、夫それから種いろく々くの宝たからを振ふり出だしま

すが、かぶとちやう兜町のお宅へ往つて見ると子宝の多い事。甲「第一だいいこくりつぎんこう国立銀行で大黒の縁は十分じふぶんに在ります。乙「そんなら蛭え子は何所どこだ。甲「馬越恭平君さ。乙「へー何う云ふ理由わけです。甲「ハテ恵比寿麦酒の会くわいしやちやう社長で、日本にほんで御用達の発おこりひるこは、蛭子の神かみが始めて神武天皇へ戦争の時弓矢と酒や兵ひやうろ糧うを差上げたのが、御用を勤めたのが恵比須えびすの神かみであるからさ。

乙「成程、そこで寿老神は。甲「安田善次郎君よ、茶があるからおつな頭巾づきんを冠かむつて、庭を杖つゑなどを突ついて歩いて居る処あは、まる恰じゆらうじんで寿老人さうの相さうがあります。乙「シテ福祿寿は。甲「ハテ品しなながは、ますだかうくん川の益田孝君さ、一夜やに頭あたまが三尺延じやのびたといふが忽たちまち福ふくも祿ろくもますだくん益田君と人のあたまに成なるとは実じつに見み上げた仁ひとです、殊ことに大だいち

茶人やじんで書しよくわん卷まきを愛あいしてゐられます、先せんじつ日せい歳ぼ暮まゐに参まゐつたら松まつ
 と梅うめの地ぢもん紋もんのある蘆あしや屋やの釜かまを竹たけ自じ在ざいに吊つつて、交かう趾ちの亀かめの香かう
 合ふで仁にん清せいの宝たから尽つく、水みづ指さしといふので一いふく頂ちやう戴だいし
 ました。乙「ダガ福ふく禄ろく寿じゆには白はく鹿ろくが側そばに居ゐなければなるまい。
 甲「折をり々く話はなしかを呼びます。乙「成なる程ほど、ダガ此こんど度はむづかし
 いぜ、毘びし沙や門もんは。甲「ハテ岩いは崎さき弥や之の助すけ君くんです、何なんだつて日にほん
 本ぎん銀かう行さう総さい裁いといふのだから金きんの利りばかりも何どの位くらゐあがるか大たい
 層さうな事ことです、アノ御おかた方やの槍やりでも突ついて立たつた姿すがたは、毘びし沙や門もん天てん
 の相さうもあります、使つか者ひしめは百むか足かでだと云いふから百むか足かでが幾いく千せん疋び居ゐ
 るか知しれねえから、金きんの足あしが何どの位くらゐあがるか知しれねえとおもふの
 さ。乙「そこで布ほ袋ていさんは。甲「御ご存ぞん生じやうなら川かは田だ小こ一いち郎らう君くんだね、

はらはらの膨ふくれてゐる処ところから体格かつぶくと云ひ、ニコヤカなお容貌かほつきと云ひ、
 頸えりが二重ふたへに成なつてゐる様子やうすはそつくりだね、何なにしろもう神かみになつ
 ちまつて仕しやうがない、目下もくかでは大倉喜八郎君おほくらき ちゅうくんさ。乙「ウム何ど
 う云いふ処ところで。甲「ハテ、愛あい嬌きやうもありなか〜大腹おほつばらな仁ひとで
 す、布袋和尚ほていをしやうに縁えんがあるのは住居すまゐが悉皆寺みなたらです、殊ことに彼程あれほどに
 成なるまでには、跣足はだしで流れ川わたを渡る様やうな危あやふい事ことも度々たびく有あつたと
 さ、遊ぶ時ときには大袋おほぶくろを広ひろげる事こともあり、芸妓げいぎも極ごくくお酌しやくのか
 ら子供こどもを多くお呼び被な成なるのがお好すきだとさ。乙「時に困こまるのは弁べ
 天てんでせう。甲「まア富貴楼ふつきらうのお倉くらさんかね、福分ふくぶんもあり、
 若い時ときには弁天べんてんと云いはれた位くらゐの別嬪べつぴんであつたとさ、宅たくは横よこ
 浜まの尾上町おちやうです、弁天べんてん通とほりと羽衣町はごろもちやうに近ちかいから、それ

に故人こじんの御亭主ごていしゆは亀さんかめと云いふからさ。乙「だツて紳士程金しんしほどき
 満家まんかにもせよ、実は弁天べんてんも男子だんしに見立みたてたいのさ。と云いつて居ゐ
 ると背後うしろの襖ふすまを開あけて。浅あさ「僕ぼくが弁天べんてんです、僕ぼくが弁天べんてんさ。甲
 「おや貴方あなたは浅田正文君あさだせいぶんくんではありませんか、シテ貴方あなたが何どうい
 ふ理由わけで。浅田「ハテ僕ぼくは池いけの端はたに居ゐるからぢや。

青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年6月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

七福神詣

三遊亭円朝

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>